

ヨハネによる福音書 2章 23～25 節

今月の箇所は、前回の「宮清め」の記事（2：13～22）に続くものです。そして、この後^{あと}の3章1節から、イエスとニコデモとの問答が続きます。その意味では、今月の箇所はこれら前後の記事を結ぶ「繋ぎ^{つな}」の部分と言えなくもありません。

けれどもそこに、見過ごしにできない言葉が記されています。「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」（24）。どこかシニカルで、寒々しくも聞こえる言葉ではないでしょうか。ですが、ヨハネが記すこの言葉の裏に 実は、「信じるということ」の本質に関わるメッセージが隠されているのではないかと。当時のユダヤ人たちが大事なところでズレていた その信仰のあり方について、ヨハネは重要な指摘を込めて、この短い一節を挿入したのではないかと。そんなふうを感じさせられます。

だとしたら、今月の箇所は、軽々に扱うことのできない重い繋ぎの部分と言うべきではないでしょうか。

「イエスは過越祭の間 エルサレムにおられたが・・・」（23）

・前回の宮清めは、過越祭を間近にして、イエスがエルサレムに上^{のぼ}られた折の出来事でした。つまり、今回の記事はこれに続くもので、場所はその「エルサレム」となります。

・時期は、宮清め^{のち}の後の「過越祭の期間中」です。

*過越祭：ユダヤの3大祭りの一つで、旧約時代にイスラエルの民が奴隷のエジプトを脱出したのを記念するもの。祭りの名は、エジプトの上に災いをもたらした神が、その一方でイスラエルの家は過ぎ越し、これをエジプトから解放してくださったことに由来する。年に一度の大祭^{たいさい}で、エルサレムの近郊約30キロ以内に住むユダヤ人の成人男性はすべて、参加を義務づけられていた。

「そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた」（23）

・そのエルサレムで イエスが「しるし」を行なわれたことが、ここから分かります。

・しかも、ヨハネによる福音書の場合、この「しるし」という表現には大きな意味合いがありそうです。というのも、前々回の「カナの婚礼」のところで短く触れたように、ヨハネ福音書は

①いわゆる「奇跡^{デユナミス}（δύναμις, -εως, ἦ）」という表現を一度も使っておらず、

②そこに見られるのは、「しるし^{セーメイオン}（σημείον, -ον, τό）」と「業^{わざ エルゴン}（ἔργον, -ον, τό）」という言い方だけだからです。

・なおかつ、これらの中でも

①ヨハネが専ら用いているのは「しるし」という言葉のほうであり、

②ヨハネはそれを、いわゆる奇跡的な出来事だけでなく、普通の仕業^{しわざ}にも当てています。

・こうしたことは いったい、ヨハネのどんな思いから来ているのでしょうか。ヨハネはなぜ、こうした用語の使い方をしたのでしょうか。

・そもそも、「しるし」とはどんなもので、どんなところにその意味があるのでしょうか。

*参考：①「しるし」とは通常、事を行なった人物について、何事か意味ある事柄を示す場合に使用。②いわゆる奇跡的な仕業に関しては、イエスはどちらかという、消極的な態度を取ってもおられる（マタイ 8：4、マルコ 1：44、ルカ 5：14 他）。

・ちなみに、ここでの「しるし」は（原語のギリシア語では）複数形で書かれています（ $\tau\acute{\alpha}$ セーメイア $\sigma\eta\mu\epsilon\acute{\iota}\alpha < \sigma\eta\mu\epsilon\acute{\iota}\omicron\nu, -\omicron\nu, \tau\acute{o}$ ）。前回の「宮清め」をはじめとして、病気を癒やすなど、ほかにも幾つか意味ある業をなさったと考えられます。

・そして、それらのしるしを見て、多くの人がイエスの名を「信じた」というのです。

・これは「イエス・キリストを主と信じる」と言うときの普通の言い方（ $\acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\tau\epsilon\upsilon\sigma\alpha\nu < \pi\iota\sigma\tau\epsilon\upsilon\omicron\omega$ ）で、そこに皮肉な嫌みなニュアンスはありません。

・だとすると、人が普通 口にすると同じ信仰の告白を、多くの人たちがした。けれども、それに対して イエスは「その彼らを信用されなかった」（24）というわけです。なんとも心ざわつかされる記述ではないでしょうか。

・ここにはたして、なんらかのメッセージが隠されているのか。自身のこととして考え合えたらと思います。

「しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった」（24）

・問題は、

①一つには、ここで言われている「彼ら」とはいったい 誰のことなのか、ということではないでしょうか。エルサレムで過越祭をまもっていた当時のユダヤ人たちがそれであったのは、言うまでもありません。ただ、事は単にそれだけのことなのか。この私たちには関係のないことなのだろうか、と考えさせられます。

②そして また一つには、イエスは彼らをなぜ「信用されなかった」のか、ということです。信用されなかったその理由とは、何なのだろうか。どこに問題があったのだろうか。それが分からなければ、どうにも先に進めません。

・と同時に、そもそも・・・とも言うべき問題が、そこにはさらにまたあるように思われます。すなわち、「信用」とか「信頼」とかいう事柄はたしかに、人が人として生きるうえで、誰にとっても大切なことと言えるでしょう。しかし、その一方で、「この自分なら、そんな人間になれるかも・・・」と どこかで密やかに思っている自分がいたりもするのではないか。他人事ひとごとでなく、そんなふうに感じさせられるからです。

・だとすれば、今回の記述は私たち人間の本質とその信仰のあり方にいま一度 目を向けさせ、事をいつそう深く考えさせるものと言えはしないでしょうか。

「それは、（イエスが）すべての人のことを知っておられ、

・・・何が人間の心の中にあるかをよく知っておられた（からである）」（24、25）

- ・ヨハネはそうした問題意識を内に抱きつつ、このような叙述をイエスについて記したのではないのでしょうか。
- ・つまり、人ははたして 全く信頼に足る 非の打ちどころのない存在と云うのか、という問いです。
- ・しかも、それを信仰の問いとして、神の前で深慮するとしたら・・・。

参考：「見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである」(20：29)

・例えば、イエスがもし、人々の前でパフォーマンスの宣言をされたなら、事態はどんな展開を見せたか。かつ、その後何^{あと}が来たと予想されるか。想像力を膨らませてみると、どうでしょうか。事を考えるうえで何らかのヒントがあるように思われます。

・ちなみに、今月の2章には 以下のとおり、「信じる」という表現が3回 出てきます。

- ①「弟子たちはイエスを信じた」(11)
- ②「弟子たちは・・・聖書とイエスの語られた言葉とを信じた」(22)
- ③「多くの人がイエスの名を信じた」(23)

ここで気づかされるのは、彼らが「何」を信じたと書かれているか、ということです。

・こうしたなか、ヨハネ福音書が20章でイエスの言葉として紹介しているのが、上掲の一節です。周知のとおり、イエスの復活を信じなかった弟子のトマスに対して言われたものです。

・このような全体から、ヨハネが今月の箇所^{箇所}で暗示する問題の所在とそこからの出口について考えをめぐらしてみたいかがでしょうか。

参照：「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(3：16)

・そのうえで、今月の箇所が直後に、読む者をそこへと連れ入るように繋げているのが「イエスとニコデモとの対話」です。

・そして、その対話が進みゆくその先に待ち受けているのが ほかでもない、上記の言葉です。聖書の中でも一、二を争う、有名な一節です。御存じのとおり、「聖書の中の聖書」と呼ばれています。

・ニコデモは律法に厳格なユダヤ教のファリサイ派に属し、ユダヤの最高法院の議員でもありました。その意味で、ニコデモは、ユダヤ教を中心とした 当時のユダヤ社会の体制を代表しているとも言えるでしょう。それはまた、イエスを信じなかった不信の人間の象徴とも言えます。

・なのに、今月の箇所は読者を、そのニコデモとの対話の中に繋ぎ入れていきます。

・そして、なんと 不信のそのニコデモに向かって、救いのいのちの一節である「聖書の中の聖書」がイエスの口から発せられるのです。

・そこへと導き入れる今月の箇所は、読む者にいったい、どんなメッセージを伝えようとしているのでしょうか。

.....

「信じる」とは、そもそも、何をどう信じることなのでしょう。
信用に欠ける私たち・人の救いは、いったい、どこにあるのでしょうか。